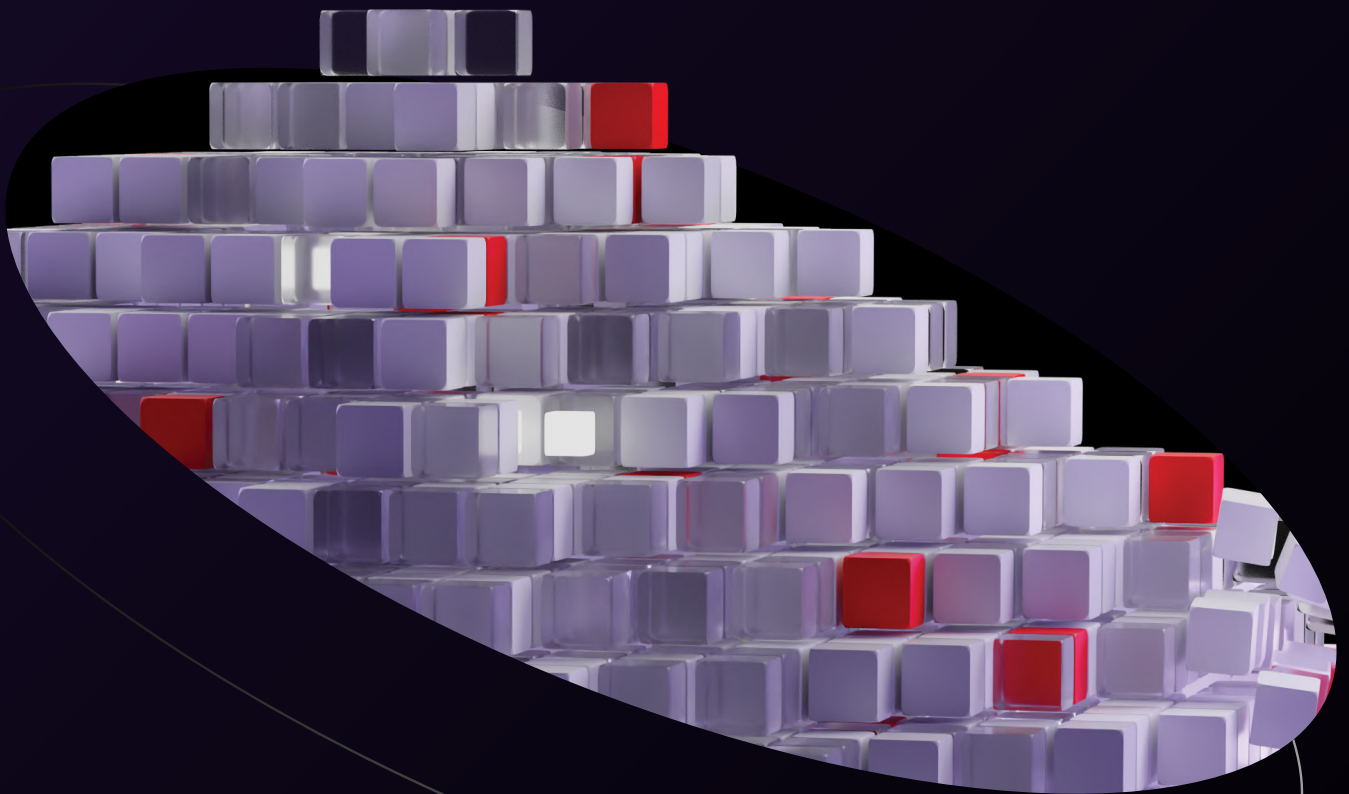


適応力のある企業：

AI への対応力が破壊的革新への 対応力となる理由

Michael Ferris (マイケル・フェリス)

シニアバイスプレジデント兼 COO (最高執行責任者) および CSO (最高戦略責任者)



執筆者紹介

Michael Ferris (マイケル・フェリス) は、Red Hat シニアバイスプレジデント兼 COO および CSO (最高戦略責任者) です。この役職において Ferris は、あらゆる製品とサービス、合併と買収、市場形成パートナーシップ、社内業務を通じた Red Hat のグローバルビジネス戦略の構築に注力しています。

Ferris は 25 年以上にわたり、Red Hat のビジネスモデルの価値向上と、顧客、パートナー、オープンソース・コミュニティのニーズへの対応に注力してきました。Red Hat® Enterprise Linux® の初代プロダクトマネージャーを務め、その後、Red Hat のサブスクリプションをキャパシティモデルから消費モデルへと進化させました。これにより、パブリッククラウドプロバイダーで Red Hat 製品を使用できるようになり、Red Hat 認定クラウド & サービスプロバイダー・プログラムが確立しました。このプログラムには 1,300 を超える Red Hat パートナーが含まれており、お客様は Red Hat ポートフォリオ全体でマルチクラウドおよびハイブリッドクラウドのパラダイムを使用できます。

vFerris は Red Hat のビジネス・アーキテクチャの定義にも取り組み、重要なパートナーシップに関する戦略策定とビジネス交渉を主導してきました。こうした取り組みにより、Red Hat はオープンソース開発モデルを、その価値提案やさまざまなサブスクリプションモデルと組み合わせて、変化する市場のニーズに対応できるようになりました。Ferris は、Red Hat が AI に重点を置いた組織になるための取り組みを主導する責任を担っています。

Ferris は、クラウドコンピューティング分野で公開された 85 件以上の米国特許の発明者または共同開発者であり、これらすべての特許はオープンソース開発の支援と保護を目的とした [Red Hat の特許に関する見解と約束](#) の対象となっています。



目次

はじめに：

ニューノーマルはノーマルではない

私たちが直面している変化のペースは普通（ノーマル）ではありません。テクノロジーの破壊的革新を予測できることはほとんどありませんが、導入に値するテクノロジーをリーダーがゆっくり見極められる時代は終わりつつあります。実際、最近の IBM の調査によると、「CEO の 64% は、後れを取るリスクを回避するため、一部のテクノロジーにはそれが組織にもたらす価値を明確に理解する前に投資すると回答」しています。¹

かつて IT イノベーションは、地平線に現れる波に例えられていました。つまり予見可能な変化だったわけです。テクノロジーの向上と競争の要求によって加速された今日のペースは、目に見える波から絶え間なく渦巻くイノベーションの海へと変化を遂げました。

多くの方が自身やリーダーシップチームに対して「**組織の AI 戦略はどうあるべきか**」と問うていることでしょう。

人工知能 (AI) はそうした流れの中で発生した根本的な変化であり、AI が関わるあらゆる業界を再構築する可能性を秘めています。AI 市場は飛躍的に成長することが予測されており、Gartner® は「世界の生成 AI (GenAI) への支出は 2025 年に 6,440 億ドル (2024 年比 +76.4%) になると予想される」としています。² そのためリーダーは、この機会を利用して行動を起こさなければならないという多大なプレッシャーにさらされています。多くの組織は導入を急ぐあまり、複雑性を増加させ長期的なイノベーションを妨げかねないリアクティブで短期的な決定を下すリスクを取っています。

多くの方が自身やリーダーシップチームに対して「組織の AI 戦略はどうあるべきか」と問うていることでしょう。すでに独自のアプローチを確立している方もいるかもしれません。しかし、より広範に適応する能力を身につけなければ、すぐに圧倒されてしまう可能性があります。最初に問うべき、そして最も重要な問いは、具体的な戦略をどうすべきかではなく、「適応力のある企業をどう構築するか」です。

なぜなら、破壊的革新に適応できる企業は、AI (そしてその後現れるあらゆるもの) にも対応できる企業だからです。



¹ IBM Institute for Business Value, 「[2025 CEO Study: 5 mindsets to supercharge business growth](#)」、グローバル C-スイートシリーズ、32 版、2025 年 5 月。

² Gartner プレスリリース、「[Gartner Forecasts Worldwide GenAI Spending to Reach \\$644 Billion in 2025](#)」、2025 年 3 月 31 日。Gartner は、米国および世界における Gartner, Inc. および/またはその関連会社の登録商標およびサービスマークであり、本書では許可を得て使用されています。無断複製・転載を禁じます。

レジリエンシーから適応性、耐久性へ

適応力のある組織とは、迅速なイノベーションを実現する文化や戦略的な考え方を取り入れ、積極的に維持し、変化に直面しても人々が生き残るだけでなく成長できるテクノロジー、ツール、サポートを提供できる組織のことです。多くのリーダーはレジリエンシー（障害から立ち直る能力）を求めています。しかしこの AI 時代において、立ち直るだけでは十分ではありません。私たちはさらに上の**耐久性**を目指す必要があります。

耐久性のある企業は単に回復するだけではなく、周囲の世界が変化する中でも絶えず価値を提供し続けます。その文化のおよび技術的基盤により、新たなモデルやフレームワーク、ツールが次々と登場しても方向性を乱されことなく、適応し、進化し、機会を捉えることができます。

耐久性は**適応性**、つまりダイナミックなグローバル市場に対応してリソース、プロセス、ツールをシフトするために戦略を調整する能力と密接に関連しています。また、企業は適応性の高い人材も必要としています。そのためには、学習と開発に対する投資、およびイテレーションを成功させるための実験のための時間が必要になります。これらは新しい概念ではありません。Linux や仮想マシン、クラウドネイティブ・コンピューティングに適応できなかった企業は、これらのパラダイムシフトを生き延びるのに苦労しました。

この 2 つの柱を正しく実行することで、変化に向けた組織の準備が整い、チームは AI 戦略を実行するためのコンテキストと能力を得ることができます。これは、モデルをデプロイすることで始まるものではありません。ビジネス目標を明確に見据えることで始まるのです。言い換えれば、まず問題あるいは課題を理解して定義し、その後で初めて AI がそれらの解決に役立つかどうかを確認する必要があります。

最善の行動方針を見出すため、以下の質問に回答してみましょう。

☐ 貴社が現在提供しているものに、顧客はどのような反応を示していますか？

☐ より効率的または迅速に対応するために、内部プロセスをどのように改善できますか？(必要なのはスピードですか、それとも別のものですか)

☐ 顧客からのフィードバックに基づいて、それらのオファリングをどのように改善または拡張できるでしょうか？

☐ 顧客にとっての価値向上、組織の効率性やレジリエンシーの向上などを実現するその他の機会（現在または近い将来）はありますか？

☐ 貴社の能力に影響（または破壊的革新）を与える可能性がある、または新しい機会をもたらす可能性がある技術トレンドや初期イノベーションは何ですか？

耐久性と適応性を備えた AI 対応エンタープライズのブループリント

ここまでで課題を見極め、目標を設定しました。では、変化に直面した際にただ立ち直るだけでなく変化を通じて進化し、繁栄する基盤を築くにはどうしたらよいでしょうか。Red Hat の最高戦略責任者として、私は製品チームと協力して AI を当社の製品に組み込んでいます。また、社員が AI ツールやプロセスを導入して改良する過程を最前列で目の当たりにしています。そうした経験を通じて、私は取り組みを成功させるために共通する要素を特定し、探求することができました。これから説明する 4 つの重点分野は、文化的にも技術的にも変化に適応する必要があるあらゆる組織にとって極めて重要であると確信しています。

1 AI にさせたいことについての明確かつ共通の認識を確立する

何を構築するにしても、まずはブループリントが必要です。AI は多くのことができますが、何をさせる必要があるのでしょうか？テクノロジーの荒野をさまよいながら、ひらめきという雷が落ちるのを期待するのはやめましょう。最善策は以下の通りです。

- ▶ **ビジネス成果に焦点を当てる：**チームのフィードバックや顧客との会話を深く掘り下げて、具体的で価値の高いビジネス上の課題やチャンスを特定します。求められているのは開発者の生産性向上であったり、サプライチェーンの最適化、あるいはパーソナライズされた新しいカスタマーエクスペリエンスであったりするかもしれませんが、重要なのは実際の成果に合わせて戦略を調整することです。AI の計画は、期待されているという理由だけで策定するものではありません。解決すべき問題を最初から念頭に置いておくことが重要です。
- ▶ **明確な重要業績評価指標 (KPI) を確立する：**成功の形を最初から定義しましょう。AI の概念実証 (POC) は、明確なベンチマークに基づいて評価されるべきです。これにより投資が具体的な価値に結びつくのに加え、効果的に学び、改善を重ねることが可能になります。

2 実験と専門知識の文化を構築する

目標を達成するのに、テクノロジーの力だけでは十分ではありません。耐久性と適応性は組織の人材から生まれます。Red Hat にとっての最大の競争力は、オープンな企業文化です。このような文化を育むことで、従業員がリスクを取り、実験と失敗を繰り返し、適応し、再試行できるようになります。この迅速かつ反復的なアプローチでは、失敗から学ぶことが優先されます。新しいことに挑戦し、経験と専門知識を身につけようとする意欲が成功への鍵となります。AI を扱う場合、このような考え方や文化はこれまで以上に重要です。

- ▶ **オープンコラボレーションを受け入れる：**最良のアイデアはどこからでも生まれます。たとえ失敗しても安全に実験できる環境を育み、役職に関わらず、厳しい質問が単に許容されるだけでなく、積極的に奨励される場を創りましょう。
- ▶ **人に投資する：**AI の人材ギャップは現実には存在しています。Bain & Company の四半期ごとの AI アンケートの回答者の 42% が、社内の専門知識やリソースが不足しているために自社の生成 AI テクノロジー導入を加速できていないと述べています。³ 既存の従業員が変化に適応して対応できるようにするには、トレーニングや体験的な学習が必要になる場合があります。市場イノベーションを成功させるためには、従業員の成長が極めて重要です。現在 Red Hat では AI ツールとトレーニングに多額の投資を行っており、すべての社員が利用できるようにしています。また、各チームが AI アプリケーションを共に実験し、検討するための時間と空間を確保できるようにすることで、オープンでコラボレーションを育む Red Hat の文化を促進しています。Red Hat は生産性の向上だけではなく、深く実践的な専門知識の構築を目指しています。AI の進歩によってもたらされるメリットと影響を完全に理解せずに、AI の進歩をお客様に推奨することはできません。

³ Bain & Company, 「[Survey: Generative AI's Uptake Is Unprecedented Despite Roadblocks](#)」、生成 AI の調査は 2025 年 12 月に実施され (n=184)、2025 年 5 月に公開されました。

3 データとアプリケーション、その所在を把握する

Red Hat では以前から、クラウドはハイブリッドだと話してきました。AI の大きな可能性は、アプリケーションが存在するあらゆる場所で利用できるからこそ実現します。したがって、AI もハイブリッドでなければなりません。AI モデルの中核であるデータは、データセンター、複数のパブリッククラウド、ネットワークエッジなど、あらゆる場所に存在します。

- ▶ **データとアプリケーションに AI を導入する：**AI ワークロードをデータソースやアプリケーションの近くに配置することで、レイテンシーを低減してトランザクションの効率化を実現できます。これにより、環境全体にわたるセキュリティの管理と維持が可能になります。したがって、AI 戦略を成功させるには、ハイブリッドクラウド戦略が欠かせません。また、データやアプリケーションの場所を問わず、セキュリティ、コンプライアンス、データ主権を損なうことなくモデルのトレーニング、チューニング、実行を可能にする必要があります。多くのお客様にとって、これは、あらゆるモデル、あらゆるハードウェア・アクセラレーターを使用して、あらゆるクラウド環境でビジネスを運営できる柔軟性を備えた戦略的アプローチを意味します。
- ▶ **一貫した基盤を実装する：**ハイブリッドアプローチによって、AI イノベーションが複数の場所で個別に導入されることを回避できます。ハイブリッドアプローチでは、データ、アプリケーション、モデルを統一された (かつ複製可能な) 方法で管理できるようにするために、すべての環境にまたがる一貫したプラットフォームが必要です。

4 まずはモダナイズ、AI の導入はその後

従来のテクノロジー基盤に AI を追加しようとすることは馬車にロケットエンジンを搭載するようなものであり、間違いなく悲惨な結果を招きます。レガシープラットフォームやモノリシックなアプリケーションを使っているのは、AI の導入はできません。

進歩に対するこれらの障壁を克服するために、組織をモダナイズして AI 導入に備える方法を検討しましょう。

- ▶ **自動化と単純化：**自動化は、AI の前段階となる文化的小および技術的基盤です。チームが自動化されたワークフローに慣れることで、AI 導入に必要なマインドセットが育まれ、テクノロジーをコントロールの喪失ではなく、イノベーションの促進要因として捉えることができます。
- ▶ **先進的なプラットフォームを採用する：**プロプライエタリーでサイロ化されたシステムから、オープンで柔軟かつ一貫性のあるハイブリッドクラウド・プラットフォームに移行すると、AI 以外の進歩も得られます。Linux、コンテナ、Kubernetes (Red Hat OpenShift® の一部でもあるコンテナ・オーケストレーション・エンジン) などのテクノロジーは、将来の AI を取り入れたアプリケーションを含め、先進的なアプリケーションの構築、デプロイ、管理に必要な適応性の高い基盤を提供します。

AI カオスに対処する

オープンソース・コミュニティでは、AI に関するイノベーションが活発に行われています。これは素晴らしいことですが、これによりカオスがもたらされる可能性もあります。Llama Stack や Agent2Agent など多数のプロジェクトがある中で、組織に適したテクノロジーを選択するにはどうすればよいでしょうか？

IT リーダーは、数千万ドル、場合によっては数億ドル規模の既存投資を抱えています。これらの本番環境を放棄して、初期段階や進化中の技術的進歩を追いかけることは望ましいことではありません（そして、まず不可能です）。オープンソースのイノベーションとは、単に次世代の IT を先導するだけではなく、従来のシステムと AI の未来をつなぐ最前線にあります。

そのようなオープンソース・コミュニティ・プロジェクトの一つに、モデル・コンテキスト・プロトコル (MCP) があります。MCP により、AI エージェントは既存のリソースを活用してあらゆる複雑性レベルのタスクを実行できます。そうしたリソースには特に AI がエンタープライズにとって不可欠になる前に構築されたテクノロジーが含まれます。MCP は、オープンプロトコルに基づくクライアント/サーバー・アーキテクチャを提供し、AI が人間のチームが使用するのと同じツールやアプリケーションにアクセスできるようにします。エンジニアや開発者の役割を果たす真の自律型 AI という未来像は、このような隔たりを埋めることができ初めて現実のものとなります。

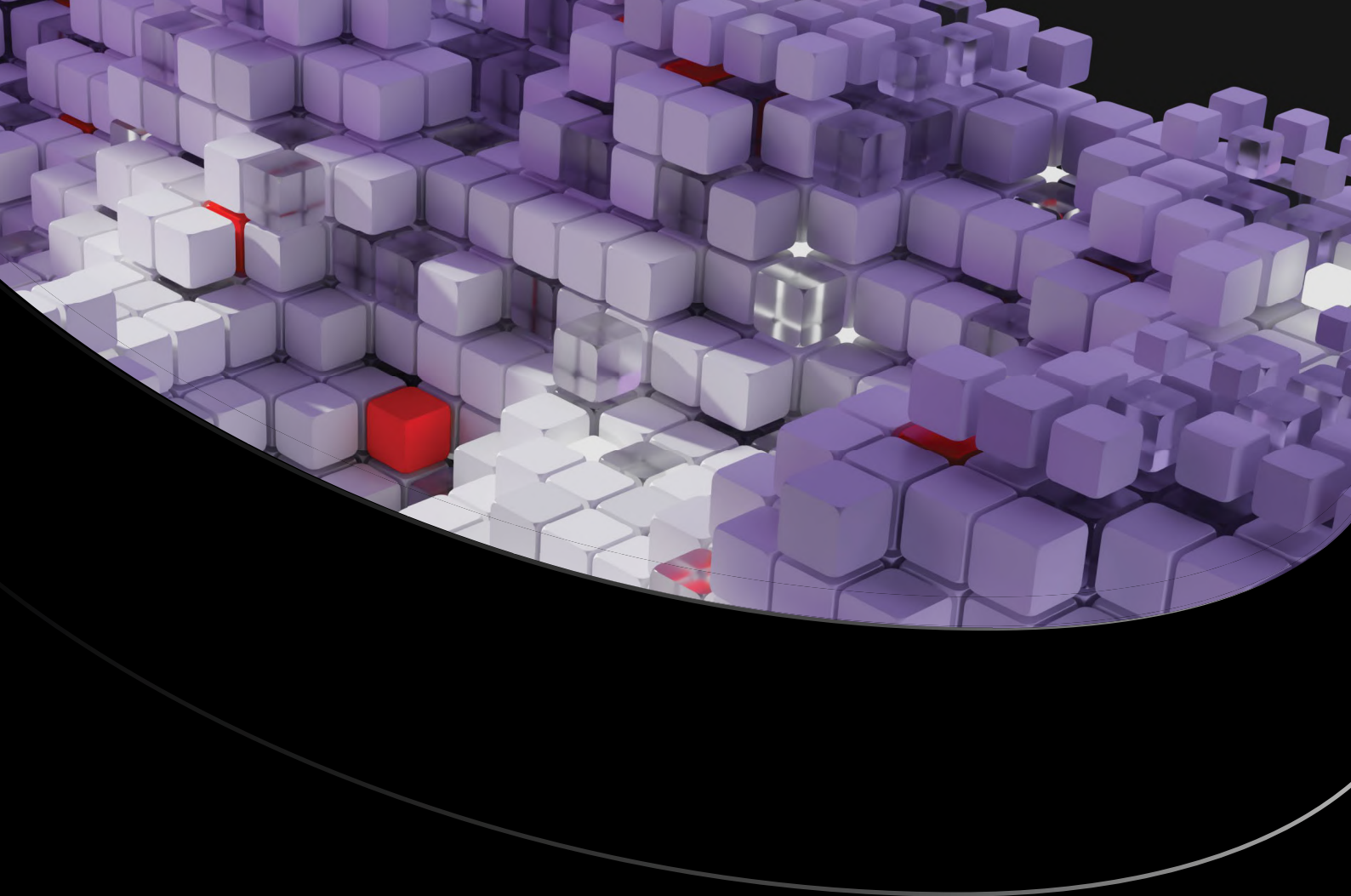
オープンソースやテクノロジーのコミュニティにおけるエンタープライズ組織の架け橋としての Red Hat の歴史的役割が、ここで強力な優位性をもたらします。Linux の初期段階では、OS のイノベーションのペースがあまりにも速すぎて企業への導入には適しませんでした。迅速で予測不可能なリリーススケジュールに、企業はついていくことができなかったのです。Red Hat の成功は、この優れたオープンソース・イノベーションを受け入れ、それを安定性と信頼性を備えたものへと進化させ、最終的にはサブスクリプション形式で提供される Red Hat Enterprise Linux として確立したことにより達成されました。Red Hat のそのような姿勢は現在でも変わっていません。MCP のような特定でありながら普遍的なニーズの支援においても、AI のような大規模な産業変革のエージェントにおける技術的進歩の支持においても、同じことを行っています。

現在、業界の多くは AI モデルに重点を置っていますが、エンタープライズ AI については、これはまだ始まりに過ぎません。現在のほとんどの AI エンゲージメントにおいて、求められる成果は推論の時点、つまりモデルが答えを提供する瞬間に生成されます。AI の真価はそこで発揮されますが、そこは同時に AI 戦略の弱点が露呈する可能性のある部分でもあります。Gartner は「市場が成熟する 2028 年までに、データセンター・ワークロード・アクセラレーターの 80% 以上が、トレーニング用ではなく推論用に特化してデプロイされるようになる」と指摘しています。⁴

“...2028 年までに、データセンター・ワークロード・アクセラレーターの **80% 以上**が、トレーニング用ではなく推論用に特化してデプロイされるようになる。”⁴

⁴Gartner, 「[Forecast Analysis: AI Semiconductors, Worldwide](#)」、Alan Priestley, 2024 年 8 月 2 日。

Gartner は、米国および世界における Gartner, Inc. および/またはその関連会社の登録商標およびサービスマークであり、本書では許可を得て使用されています。無断複製・転載を禁じます。



Red Hat が AI を IT リーダーにとってより管理しやすいエクスペリエンスにするために注力している理由が、このような需要の高まりです。Linux やその他のオープンソース・テクノロジーのときも同じでした。Red Hat が AI の実行フェーズを中心に構築を支援するエコシステムの構成要素には、実績のある [vLLM](#) プロジェクトを基盤とする [Red Hat AI Inference Server](#) や、[llm-d](#) などの先進的なコミュニティ・テクノロジーがあります。そうしたエンタープライズ推論テクノロジーは、他のエンタープライズ IT プラットフォームと同様に、既知のライフサイクル内でサポートされます。また Red Hat は、大規模な AI ワークロードをより簡単に実行できるようにするアップストリームのイノベーションの促進と貢献にも取り組んでいます。

Red Hat は、エージェント型のテクノロジーとシステムに対するアプローチをこれと同じ方法で行っています。たとえば、MCP は AI エージェントの運用方法に革命をもたらす可能性を秘めています。MCP サーバーには、エンタープライズ IT 組織が期待する適切なセキュリティプロトコル、コンプライアンス要件、信頼性も必要です。そのため、Red Hat はこれらのコミュニティと連携して成熟したオープンソース AI のイノベーションを発展させ、先進的なエンタープライズやプロダクションシステムの厳しい要求に対応できるようにします。

Red Hat は将来必要になるものと現在必要なものとのバランスを取りながら、企業にとっての複雑さを軽減します。Red Hat は世界中の組織の適応性と耐久性を向上させ、環境をモダン化して前進するための支援を提供してきました。

まとめ：

未来を切り開く

AI 以前の時代から AI 時代への移行は、大きな可能性に満ちています。耐久性と適応性のある企業の構築は一度完了すればそれで終わりというものではなく、継続的なコミットメントです。適切な企業文化、適切なプラットフォーム、適切なパートナーを持つことが重要です。Red Hat をぜひご活用ください。

☐ エンタープライズ AI やオープンイノベーションを検討されていますか？

実務担当者がスキルを構築したり、意思決定者向けの戦略的ガイダンスを確認したりするのに役立つ実践的なリソースをご覧ください。基本的な概念を把握することも、デモ、ニュース、知見、お客様事例をより深く掘り下げることもできます。

ai.redhat.com

☐ その他のテクノロジー上の課題に関するガイダンスをお求めですか？

The Executive's Collection ではより専門的な視点を紹介しています。Red Hat のリーダーと業界アナリストが、より賢明な判断を下し、破壊的革新に先んじて対応できるよう支援します。

redhat.com/executives-collection





Red Hat について

エンタープライズ・オープンソースソフトウェア・ソリューションのプロバイダーとして世界をリードする Red Hat は、コミュニティとの協業により高い信頼性と性能を備える Linux、ハイブリッドクラウド、コンテナ、Ansible、および Kubernetes テクノロジーを提供しています。Red Hat は、新規および既存 IT アプリケーションの統合、クラウドネイティブ・アプリケーションの開発、Red Hat が提供する業界トップレベルのオペレーティングシステムへの標準化、複雑な環境の自動化、セキュリティ保護、運用管理を支援します。受賞歴のあるサポート、トレーニング、コンサルティング・サービスを提供する Red Hat は、フォーチュン 500 企業に信頼されるアドバイザーです。クラウドプロバイダー、システムインテグレーター、アプリケーションベンダー、お客様、オープンソース・コミュニティの戦略的パートナーとして、Red Hat はデジタル化が進む将来に備える企業を支援します。

Copyright © 2025 Red Hat, Inc. Red Hat, Red Hat ロゴ、および OpenShift は、米国およびその他の国における Red Hat, Inc. またはその子会社の商標または登録商標です。Linux® は、米国およびその他の国における Linus Torvalds 氏の登録商標です。